

林子平 — 志あれば必ず道あり —

江戸時代の終わりごろ、アメリカのペリーが軍艦をしたがえ、突然来航し、日本中が大さわぎになりました。しかし、その六十年も前に、外国の船が攻めこんでくると予言し、そのための備えの必要性を主張した仙台藩士がいました。林子平です。

元文三（一七三八）年、子平は幕府に仕える武士の子

として江戸で生まれました。しかし、子平が三歳のころ、父親が職を失い医者であるおじに育てられました。おじの医院を手伝いながら、夢中になって本を読む毎日を過ごしました。子平は、本に書かれていることわからぬことがあると、すぐに調べて解決せぬにはいられない子どもでした。ときには、おじやおじの友人を質問せぬに、あきれさせるほどでした。

二十歳になった子平は、兄とともに仙台に移り住みました。仙台藩の仕事にすることができたのは兄だけでした。仕事が無かった子平ですが、藩のために尽くしたいと思い、藩を豊かにするための研究に取り組みました。よい政治を行っている藩があれば、遠く九州にまで調べに行くこともありました。仙台藩をよくしたいという情熱は、旅を重ねるごとにますます熱く燃え上がっていきました。子平は研究に研究を重ね、藩の政治がよくなるための案を三度も出しました。その案の中で、自分が先頭に立って藩のために尽くしたいということも書



林子平像（仙台市勾当台公園）

きました。しかし、藩は仕事をもたない子平の意見など取り入れようとしませんでした。

幸いにも、子平にはたくさん友人がいました。特に、子平の人柄にほれこんだ工藤平助たちは、温かい手を差しのべ、困っている子平に本や生活用品、ときには旅行の費用まで貸すこともありました。

以前、子平が東北地方を旅していたとき、ロシアが日本をねらっているといううわさを耳にし、子平は不安に思っていました。その情報が本当ならば、一大事です。何とかして確かめる方法がないかと考えた末に、長崎の出島に行くことを思いつきました。その当時、出島は日本で唯一オランダや中国との交易が認められていた場所でした。しかし、日本人と外国人が勝手に話をすることは禁じられていました。もしも話していることが幕府に知れてしまったら、罰を受けるかもしれません。それでも、子平は幕府の役人の厳しい目をかいくぐって、ひそかにオランダ商館長のアーレント・フェイトと親しくなりました。そして、フェイトから、

「どうやらロシアは日本、特に蝦夷地（現在の北海道）を自分たちのものにしようとしているようだ。」

という話を聞き出すことができました。ひんぱんにロシアの船が、蝦夷地周辺の海に現れていることもわかりました。蝦夷地がうばわれれば、次は間違いなく東北、そして南へと攻めこんでくることが予想されました。子平はうわさが本当であることを知り、大きな衝撃を受けました。

そのころの日本は、それぞれの藩のことしか考えていませんでした。もちろん、子平もそれまで仙台藩のことを中心に考えていました。しかし、このことはもう仙台藩だけの問題ではありません。少しでも早くこの危機を幕府や日本中の藩に知らせる必要があります。子平は地方の武士にすぎず、幕府を動かせる立場ではない自分をくやしく思いながらも、『志あれば必ず道あり』という信念をもって学問を続けました。そして、旅をして人と話してきたことを思い出しながら、今の自分ができることをやりとげようと考えるようになりました。

人柄：
その人の品格。
よい人物。

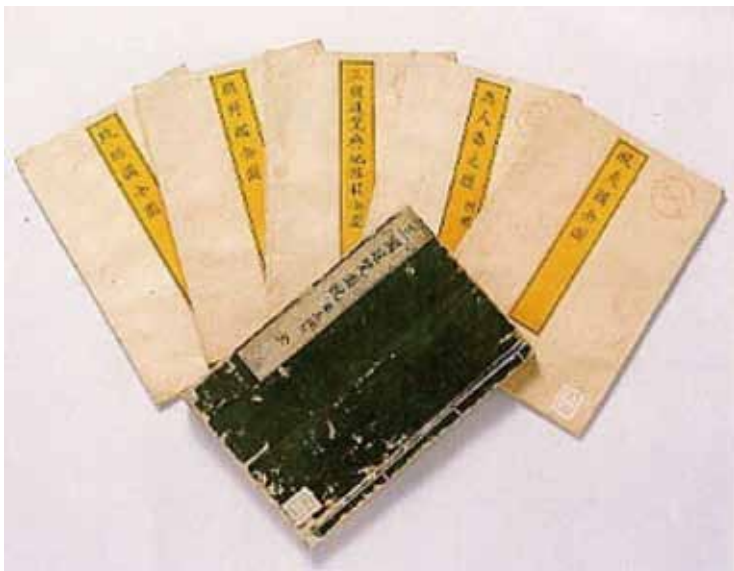
交易：
互いに品物を交換し、商いをすること。貿易。

商館長：
商いや交易をするための建物を商館といい、その長を商館長という。

子平は長崎から帰ると、寝る間もおしんで本を書き始めました。これまで読んだ本や日本中を旅して集めた情報をもとに築き上げた考えを、『三国通覧図説』と『海国兵談』にすべて注ぎこみました。『三国通覧図説』は、日本の領土や周辺の国々を地図で示したものです。『海国兵談』は、外国から攻めこまれたときどうやって防ぐかをくわしく述べたものです。日本は海に囲まれた島国であり、外国が攻めこんでこようと思えばどこからでも攻めこまれる。すぐに日本の海岸線を守る必要がある。このような日本全体を守ろうとする考えは、当時の日本人にはほとんど思いつかないことでした。

『三国通覧図説』は、五枚の地図と一巻の説明書でしたので、友人に協力してもらい、すぐに出版することができました。しかし、『海国兵談』は、十六巻（半紙三百五十枚分）にもなりました。たくさんのお金が必要となりましたが、これ以上友人に頼むわけにはいきません。しかも幕府の考えについて批判しているように思われる文章があったために、どこかの印刷屋も引き受けてはくれませんでした。金もなく、印刷屋にも断られた子平は困り果てた末に、自分で彫って印刷することになりました。当時の印刷は、木版印刷といって、版木に一字ずつ文字を彫りこんでいく方法で、決して楽な作業ではありません。しかし、子平は自分の手で版木を彫ることを決心しました。自宅の小さな部屋で、少しずつ少しずついいねいに作業を続けました。

約五年の年月をかけて、やっと三十八部印刷することができました。そのとき子平は、すでに五十四歳になっていました。



『三国通覧図説』（仙台市博物館蔵）

版木：
版を彫るための木。

できあがった本は、これまで助けてくれた友人たちに送りました。そして日本を守ってもらおうよう幕府にも送ることにしました。

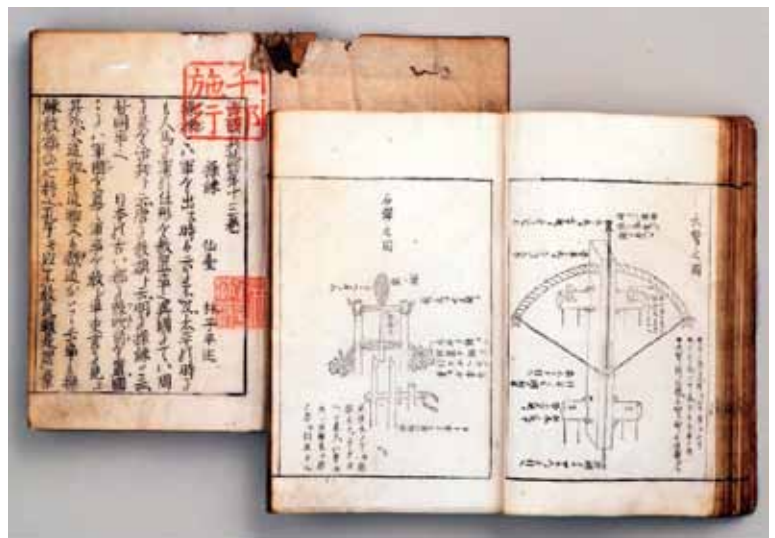
ところが、さらに印刷を続けようとしたときのことです。子平は、人々の心を不安にし幕府を批判した罪で、幕府にとらえられました。そして、できたばかりの本と版本を取り上げられてしまいました。わずかに残された『三国通覧図説』と『海国兵談』は友人の手によって書き写されて、後の時代に伝わっていきました。

子平がとらえられた次の年（一七九二）年、ロシアのラックスマンが蝦夷地に来航し、幕府に通商を求めてきました。幕府はあわてて子平が唱えていたように、海に面した藩の海岸線を守るよう命令しました。その後、たびたび外国の船が来航し、六十年後のペリーの来航につながっていきました。

日本の将来を考え、日本を守りたいという願いをもち続けた子平は、五十六歳でその生涯を閉じました。しかし、その願いは、やがて新しい日本をつくる人々の心の中で大きく花開いていきました。

林子平

林子平は、元文三（一七三八）年に江戸（現在の東京）に生まれ、後に仙台に移り住んだ。子平は日本が鎖国（江戸幕府が日本人の海外外交を禁止し、外交・貿易を制限したもの）中でありながらも長崎や江戸で見聞を広め、日本の海岸線を守る必要性を説く軍事書『海国兵談』を著した。



『海国兵談』（仙台市博物館蔵）

通商：
外国と取引をする
こと。交易。